

レンブラントとルーカス・ファン・レイデン
——「エッケ・ホモ」を中心に——

山田今日子（東北大学）

本発表は、ネーデルラントの画家・版画家ルーカス・ファン・レイデンと、レンブラントの作品を比較・検討し、レンブラントの創造のメカニズムの一端を明らかにする。レンブラントが時代や地域を超え、様々な画家の芸術作品を蒐集していたことはよく知られている。ファン・レイデンの《羽飾りを被り髑髏を持つ若者》(B. 174) (1521年頃) や《エジプト途上の休息》(B. 38) (1506年頃) からレンブラントが影響を受けたことも指摘されているように、ファン・レイデンに対する並々ならぬ関心は、レンブラントをネーデルラント版画史に位置づける際、非常に重要である。2011年にはファン・レイデンの位置づけを再検討する大展覧会も開催され、ファン・レイデンの画業全体を視野に入れて両者を比較検討する条件が整ってきた (Lucas van Leyden en de Renaissance, Leiden, 2011)。

本発表では、具体的な作品としてファン・レイデン (1510年) とレンブラント (1655年) が制作した版画作品《エッケ・ホモ》(ファン・レイデン: B. 71、レンブラント: B. 76) を中心に論じる。先行研究では、この二作品の関係について、レンブラントがファン・レイデンを崇敬し作品を購入していたことや、作品間の類似性から、主な図像源泉として指摘されてきた。しかし、両作品の関係については、構図上の類似を指摘するに留まり、二作品のネーデルラント版画史における位置づけや、またレンブラントがファン・レイデン作品をいかに消化し、変容させたのかという議論は十分とはいえない。

ファン・レイデンについては、マルカントーニオ・ライモンディやデューラーといった同時代の芸術家との交流を踏まえて検討することが重要だが、研究史を鑑みると、ファン・レイデン特有の志向は看過され、巨匠の陰に隠れてしまう傾向がある。彼の《エッケ・ホモ》は、デューラーのように4分の3正面観のキリストを大きく描き、群衆を副次的に扱って物語的側面を重視したものではなく、また北方に伝統的な正面観の強い全身像のキリストを据えるものとも異なる。彼は、舞台となるレイデンの広場や町並みを忠実に再現し、当世風の衣装をまとう群衆を大きく、反対に壇上のキリストを小さく描くことによって、出来事の同時代性、リアリティを実現した。これこそがファン・レイデンの革新性であり、夥しい先例の中からレンブラントを惹きつけた要因であった。一方レンブラントの《エッケ・ホモ》には、基本的な舞台構成や登場人物の配置等をファン・レイデンから借用した跡は見られるが、明白に異なる意図が認められる。レンブラントはファン・レイデンの理念を継承しつつも、更に近代的な方向へ推し進めた。レンブラントは、同時代的な要素によって出来事に現実味を与えるだけではなく、鑑賞者各々に対し「個人」が対峙する問題として提示し、重大な選択を迫った。これにより、鑑賞者をより積極的に出来事に参加させ、臨場感を一層高めたのである。